

# 沈從文作品における軍人

——『会明』から『辺城』へ——

土屋美津江

はじめに

沈從文は軍人出身である。彼の家は軍人の家柄で、祖父は雲南昭道鎮守使、貴州総督をつとめた。沈從文は、十四歳の時に軍隊の技術班に入り、翌年入隊し、二十一歳で勉学を志して北京に出るまでのほとんどの期間を軍隊で過ごした<sup>(1)</sup>。

沈從文は、軍人に対する思いを『『辺城』題記<sup>(2)</sup>』の冒頭で次のように述べている。

農民と兵士とに対して、わたしは口に出していえないほどの温かい愛情をいだいている。(略)わたしの祖父も、父も、そして弟もすべて軍籍につらなっていた。死んだものは一人として職務につきながら死ななかつたものはいないし、まだ死んでいないものも、職務につきながらその一生を終えるであろう。

沈從文にとって、軍人とはどのような意味をもつのか。また、『『辺城』題記』にこのように軍人のことが書かれているのはなぜか<sup>(3)</sup>。牧歌的な辺境の小さな町を描いた『『辺城』(一九三四年)』と軍人はどう関るのか。沈從文には幾つかの軍隊小説があるが、その中から『『辺城』』に繋がる作品として、『『会明』(一九二九年)』を取り上げて考

察してみたい。それによつて、『辺城』と軍人の問題についても考えたい。

## 一 会明の「森」

『会明』は、次のような話である。

会明は、軍隊の炊事夫をしている。彼は、民国革命の際、農民から兵士に「改業」し、蔡鏢の雲南護国軍蜂起にも参加した。蔡鏢の偉大さに感銘し、彼の「お前の軍旗を保塁に挿しに行け」の命令を果たさんと、それから十余年間兵士として生きている。

会明の体は將軍にふさわしい長い手足、長い顔、鬚を有していたが、心はその外貌とは不釣合いに「無邪気で善良」だった。彼は、人が嫌がるような雑務も力惜しみせず、真面目によく働いた。だが「猿のように利巧な仲間たち」からは「間抜け」扱ひされ、部隊で軍歴は最長にもかかわらず、下積みの炊事夫のままである。

会明にとつて、戦争は日常のことだ。部隊が前線に移動し出撃の命令を待つ中、会明は、夜中に目が醒めると、自分の耳が銃声か何かに注意を引き起こされたために醒めたような気がして、命令が下つたのか、夜襲か、サーベルでの斬り合い、銃剣での突き合いかと、外に飛び出す。それが気のせいであったと安堵しても、やはり仲間と話すことは戦争で死ぬ人数についての統計や、さては生死争奪の逸話で、戦争のことが頭から離れることはない。とりわけ、去年の戦闘は悲惨だった。

あの時は六月だった。倒れるなり、息はまだ止まっていけないのに、傷口から臭気を発した。更にもう一日経てば、全身を蛆が這いまわつた。さもなければ頭や顔が紫色になり升ほどの大きさに膨張して、腹も大きく腫れて、今にも破裂して腸を出す有り様になる。

彼は、醜く腐乱していく死体を目の当たりにした。それが敵兵であつてもいい気はしないという気持ちはあつたものの、戦意が衰えることはなかつた。むしろ、暑い季節を目前にし、気持ちは高揚し、開戦の命令が即刻下ることを願つた。

こうした前線に出る緊張感は、彼には喜びだつた。

所属部隊は、軍閥を打倒し反革命を打倒するために前線に移駐した。会明も意気盛んに行軍し、戦いに備えた。

ところが、開戦の命令が一向に下りない。会明の戦争に対する緊張は次第に緩み始めていった。そうした時、彼は駐屯地の村人から一羽の鶏を譲り受けた。鶏は卵を産み、雛が孵つた。彼は雛鳥の父親、母親のごとき愛情で、世話をした。彼が、雛の成長のために「非戦主義」者に傾いて来たのは明らかだつた。

折しも和議が成立し、部隊は撤退することになつた。戦争しないとすれば、会明が軍旗を挿す日は遠くなる。しかし、彼は非常に幸福だつた。

『会明』は、以上のような内容である。『会明』について、これまでの研究では専論はないが、会明に『辺城』の老人と共通するよき人間性が指摘されている。<sup>(7)</sup> たしかに両者は、善良な人間であるが、『辺城』の老人の実直な仕事振りが、人々の尊敬を受けていたのに対して、会明にあつてはその人の好きは、周りの人間から見れば「間抜け」にすぎなかつた。会明が「間抜け」と見なされるのは、軍隊という場に身を置いているからだ。<sup>(8)</sup> 会明が軍人に設定されたことの意味を考えたい。

会明には軍人としての理想、夢があり、そのために戦つてきた。ところが一転、戦争のことよりも鶏の一家に夢中になつてしまつた。これは、理想から目覚め、日常的な安穩な小動物を慈しむ小市民生活への転向を示しているのか。軍閥間の争いは醜く、捨て玉にされた兵士は惨めだ。そしてそれが果てしなく続き、この男はうだつ

の上がらぬうちに、壮年期を過ごした。この小説は、理想の消失、戦争の意義を見失った兵士の物語か。或いは、生命を浪費する無意味な戦争に対して、小さな生命を慈しみ育むことから、「非戦主義」、平和への願い、戦争回避の方向性を宿した小説と見るべきなのか。

会明が抱き続けてきた理想に注目してみたい。その理想は「森」という言葉で、彼の心に描かれている。

森の印象は都督蔡鏢のある時の訓話から作られていた。この森が指し示すところは、中国の辺境であった。或いは外国と言つてもよかつた。この外国のようなところで、軍隊は国家を防衛するために駐屯し、所謂偉大な事業をおこし、荒地を開墾しながら、食糧を生産する。

そこには、正月や節句もあり、また戦争もあつた。「だが決して、現在の軍隊の様子ではないようだった」。そうした生活が「なぜ昇官発財より意義があるのか、彼もはつきり説明できなかった」が、そこに蔡鏢から渡された軍旗を必ずや挿すつもりでいた。

会明は、蔡鏢に対する尊敬の念を、駐屯地の村人に対して語つた。会明は村人に、蔡鏢には本当は二回しか会っていないのに五回会つたと言ひ、「あの偉人」の声、顔つき、気概について語つた。村人の軍旗を見て驚いた顔に、会明は満足した。

蔡鏢の名は、『従文自伝』<sup>(9)</sup>にも登場する。私たちの地方は前年に蔡鏢による討袁戦に刺激され、軍隊は改革することなくして自存できないと、あらたに軍事学校を四つもつくり、一切新しい方式で訓練し、それによつて土地の様子も一新したとある。<sup>(10)</sup>

しかしその後の湖南は、八省数千キロに及ぶ戦線で押し引いたり「ノコギリ式」の南北戦争の戦場の中心となつた。<sup>(11)</sup> 軍隊は、戦乱のどきどきに乘じてあらゆる悪事を尽し、人々を恐怖に陥れた。<sup>(12)</sup>

さて、会明の所属部隊は「軍閥を打倒し反革命を打倒するために」前線へ移駐を命じられた。その時の会明は、次のように描かれている。

何時戦いを始めるのでありますか、と連長に訊ねた。なぜ戦いを始めるのかとは訊ねなかった。なぜなら当然救国、打倒軍閥のためにこそ戦争がある。そんなことは聞くまでもなく、わかっている。

会明は「なぜ」と、聞かない。戦争の大義がどんな名目であれ、彼は、自分が軍閥間の権力争いの戦いにこき使われていることは何となくわかっているのだろう。だから彼は、かつて反帝政をかかげて護国軍を組織した蔡鏗に軍人の理想を見出し、「現在の軍隊」とは違う軍隊の姿を「森」で思い描き、戦う意義を求めたのではないか。会明は前線で、「森」に行くために、一刻も早く戦争が始まることを願っていた。けれども前線で両軍対峙のまま、五日、六日たつても戦争は始まらない。そのような折、村人から地タバコとともに鶏をもらう。鶏は卵を産んで、二十羽の雛が孵ると、会明はその世話に気を配り、雛の遊びを目を細めて眺めるようになった。戦争が始まるのを今日か明日かと待ちわびていた彼も、戦争が始まれば雛鳥を連れて行けるかどうかを考えざるを得なくなった。その時、戦争が中止になった知らせを受けて、彼は喜ぶ。

会明の関心は、すっかり「森」から雛に移ったかのように見える。だが、物語の最後の段落は、次のように書かれている。

前線にあつて、会明は炊事夫であつたが、原駐地にもどつても会明は依然として炊事夫であつた。戦争をしないなら、あの大きな森の果てまで行くのはとても遠く、(略)まだ希望がないように感じた。しかし彼は雛に餌をやり、非常に注意深く彼らを世話して、(略)彼はとても幸福だった。六月になつても、この連隊の間で腐る者は一人もいなかった。会明がこれらの人々を眺めて笑つた時、その笑みの意味がわかる人は一人

もいなかった。

この時、「森」のことは会明の念頭から去ったわけではない。では、彼が雛を見て感じている幸福とはどういう幸福なのか。

「森」のための戦争、雛のための非戦、この二つは、対立関係にあるだろう。だが、もしかしたら「森」の生活は実はこうした雛鳥の面倒を見ることを含んでいるのかもしれない。雛をやさしく見守る彼の原駐地での束の間、の平和で幸せな生活こそ、辺境の守備、「荒地を開墾しながら、食糧を生産する」、「正月や、節句もある」という「森」で果たされるべき生活であつたのではないか。「しかし」はそれに気づかせるための強い転換の詞かもしれない。「森」は戦争を通じて実現するのではなく、一人として道端に屍をさらして「腐る」こともない、今度のような話し合いによる双方の和解によって実現してもよいのだ。何もはやり立って戦争をし、勝ち負けを決しないでも「森」の実現の方法はある。「しかし」は、「森」の夢に駆られ、そのための戦争と思ひ込み、一途にいつ戦争が始まるのかと、戦争にいつしか生き甲斐を感じるまでになっていたこの善良で愚直な古兵に、「森」は平和によつて実現し、足許にあるのだということを訴えているのかもしれない。理想、大義を山の彼方の空遠くに求めるのではなく、戦争によるのではなく、平和な手段で、今、この地に実現せよと訴えているのだとすれば、これは立派な「非戦主義」の小説だ。理想を追いかけながら、現実を目覚めたのではなく、理想を戦争によらず、平和な手段で実現できる、手近かにあるものだとということに気づかせたとしたら、軍閥間の大義名分の空しさを嘲笑うことになる。雛鳥を、目を細めて見つめるのどかな生活の貴重さを、平和の貴重さを述べている小説なのかもしれない。戦争の日常化した生活から、戦争が非日常的なものとされた生活への転換、戦争が日常である生活は、やはり奇妙な生活なのだということを描いているのかもしれない。

「森」こそ落ち着いた、心に余裕を持った生活だったと見るべきだろう。では、「森」は、会明にとって戦争の大義であると同時に、彼の「非戦主義」をも表している。これはどのように理解したらよいのか。偉大な軍人蔡鏗を理想として戦う会明と、小さな雛の命を慈しむ会明、実はこの二つの事は、彼の体と心において表現されていた。会明の体は將軍と畏怖されるほどの体格である一方、心は「子犬のように天真で、牝牛のように順良」である。会明は、「この峨峨と高くそびえ立つ体に平凡な心を入れられた」存在である。心が本質を表すなら、会明の真の姿は「非戦主義」者であり、「森」のために戦争するというのは会明の自己欺瞞ではなからうか。

沈從文が『会明』の一年後に書いた『灯』<sup>13</sup>には、一人の老兵が登場する。沈從文と思われる上海に住む「私」のところ、「私」の故郷の家に長年仕えていた老兵が訪ねて来てしばらく滞在するという話である。老兵は「幾つもの戦争に参加し、幾つもの山河を跋渉した」。その老兵に対して、「私」は次のように思う。

彼らはあるのように純朴で、同時にまたあるのように正直だ。あの最も東方的な古民族の平和な靈魂は、時代に連れさらわれ、このまるで似つかわしくない戦乱の世界に置かれ、かくも憂鬱に、かくも拘束され、生活を新しい天地に妥協させ、見る夢は、永遠に別の天地の光と色のようです。彼と向き合っていると、私はすっかり泣きたくなるのでした。

この老兵は会明に思える。沈從文は、「平和な靈魂」が戦争と言う出来事に「妥協」した様を、会明の「森」で描いていたのではなからうか。

## 二 「森」と『辺城』

軍人が辺境で守備をして、平和な暮らしがあるという「森」の姿は、『辺城』の町に通ずる。『辺城』の町は、次

のように説明されている。

この城内には昔の緑營の部隊を改編してなった守備兵の一個大隊と、それから五百前後の世帯があるだけである。(これらの世帯のうち、(略)一部分の小資本家を除けば、その他多数は皆当時駐屯にやって来た軍籍に在る人々である。)

ここには、守備兵、屯田兵が駐留している。そしてその軍隊の様子は次のように書かれている。

両省の境界地域では、十余年来、地方の軍事をつかさどる者が、安民と保護に力をそそぎ、なおその処置が適切であつたため、変事は一度も発生しなかつた。

こうした軍隊の努力の結果として、「兵士はあたかも存在しないかのよう」に、「静かで平和」な町なのである。水陸の商業が戦争のために停顿することもなく、土匪に影響されることもなく、すべてが極めて秩序立っていて、人々は分に安んじ生を楽しんでいた。(略)中国の他の地方が今まさに不幸にも必死にもがいている状態など、まるでこの辺境の町の人々は考えたこともないようなことだつた。

これが会明の夢みた「森」だろう。このような『辺城』の世界の中に、会明がいたとしたら、彼は軍閥戦争の道具として、消耗品として戦場に捨てられることはない。また、「あまりに多くの事を見てきたので、人が死ぬということなど大した事ではなくなった」というような残酷な行為に不感症に陥いることもない。軍人の誇りを持つて辺境守備に当たるとともに、愛らしい雛の成長を見守り、人間らしい生活を送ることができるだろう。

雛に愛情を注ぐ会明は、『辺城』の渡し守の老人を連想させる。老人は、翠翠の成長を見守り、彼女が幸せな結婚をするために必死になる。この老人こそ会明の後の姿なのではあるまいか。雛は孫娘翠翠だ。

軍人に注目して『辺城』を見れば、翠翠に関わる主要な人物として三人挙げることができる。老人の親友で、老

人の亡き後、翠翠の後見人になった楊馬兵。翠翠の愛した二老の父親順順。順順は「清朝時代には軍隊にいた人物で、辛亥革命の時には有名な陸軍四十九標の什長を務めた」。彼は困っている人間を見過ごしにはできず、破産した船問屋、退役した兵士などに対して惜しげもなく、できるだけの援助をした。それは自分が軍隊で苦勞した経験があるからだった。そして何より、翠翠の父親が軍人であった。まさしく、翠翠は軍人の愛から生まれた。翠翠の周りにいるこれらの軍人たちは、会明の分身か、或るいはまた会明とともに雛を愛玩した仲間の兵隊のようにも思われる。

翠翠の父親は、老船頭の娘を愛したが結婚はかなわず自ら命を絶った。これは不幸なことではある。だが、その死は戦場の死ではない。次のような軍人の人生に照らして見れば、幸せだったのかもしれない。

私はと言えば、一つの事も成すことができず、軍隊の中であちこちと駆けずりまわって、ただひたすら目を見張って、同業の友が一人二人と先の尖った銃弾に命を失っていくのを見ながら、敵の叫び声のするなかで自分を逃げ延びさせてきた。また、私の叫び声で、敵の人間が同じようにまったくおかしな顔をして逃げ出す。自分も逃げて、敵も逃げる。この両者の追いかっこは、私に人生に対する極度の疲労を感じさせたのだけれど、やはりぐるぐると駆けずり回り、またやはりぐるぐると駆けずり回るしかなかった。<sup>14</sup>

前線での極限的状況のなかで、生き延びることのみに精一杯の人生である。翠翠の父親は、人を愛し、またそのため死を選んだのは、人間らしい死であったと言えよう。

『辺城』には人々の、喜び悲しみに満ちた生活が描かれている。そうした平凡な生活の意味するものは、戦争が日常である会明、『『辺城』題記』で述べられていた「職務につきながらその一生を終える」軍人の非戦の願いにも思える。

おわりに

軍人として一生を終える、それは彼の生まれた町、鳳凰では特別なことではなかった。

『従文自伝』に従って、その町の特徴を示そう。そこはまったく奇妙なところで、二百年前、満州人が中国の土地を支配した時に、残った苗族を鎮撫し虐殺するために、一隊の屯田兵をその地に派遣してから、はじめて城郭と住民が存在することになった。およそ町というものが、ほとんどみな交通、物産、経済といった環境の下で存在し、それが町の栄枯の原因になっているのに対して、ここは別の意義の下に、なにもものにも依存せず独立して存在している。軍事上の要衝という環境の特殊性から、民国になっても兵役制度を残していた。<sup>15</sup>

鳳凰は軍事が産業ともいべき町だ。従って、

誰でも皆、兵隊になるのを希望した。なぜなら、それが若者の立身出世の道であり、またまさにそれが若者の唯一の活路であつたからである。<sup>16</sup>

この町の男たちは軍人になる。沈従文もまた軍人になるのが必然だつたのだ。男たちは、それぞれに夢を抱いて、軍人としての道を歩み出したろう。

だが、軍隊は非情、残虐だつた。『従文自伝』では殺人、拷問、処刑など、枚挙に暇がない。「われわれ兵士は殺人を見ること以外に、するべきことはないようなものだつた」<sup>17</sup>。やがてそれに慣らされて、男たちは、会明のように「人が死ぬということなど大した事ではなくなった」と感じるようになるのだろう。

沈従文が軍人を描く時、愛する生まれ故郷の町の男たち一人一人の顔が浮かぶのではないか。そして更に、沈従文は彼ら本来の「平和な靈魂」にも思いを馳せる。それに対して、丁玲が一九三一年に書いた『多事之秋』<sup>18</sup>の

中に、兵隊について次のような表現がある。

出兵さえすれば、日本人なんか怖くないぞ。中国には何百万もの兵隊がいる。

沈従文においては、軍人は数ではなく、「何百万」という集合名詞でくくりにできるものではないに違いない。沈従文にとって、軍人とは、最も非人間的で残酷な状況に、なす術もなく追いやられた素朴で善良な人々を意味するのであり、またその一人一人の人生や命が問題なのではなからうか。それが『会明』で描こうとしたもの、と思う。

#### 注

- (1) 沈従文は、所属部隊が壊滅、解散したため、警察署の事務員をしていた時期がある。その後また軍隊に入る。
- (2) 天津「大公報」文芸副刊 一九三四年四月二十五日、『沈従文文集』第六巻 花城出版社 一九八三年所収。
- (3) 城谷武男氏も「なぜ、かほどに軍人が『題記』で書かれねばならなかったのか」という問題を挙げている。城谷氏は『辺城』の主題が生命の燃焼だとし、沈従文が『辺城』の軍人（翠翠の父）に、自己のなし得なかった生命の燃焼を遂げさせたのではないか、と論じている。（『辺城』主題考「北海学園大学学園論集 昭和六十年十二月」）
- (4) 『国聞週報』十一巻一期から十六期 一九三四年一月から四月。
- (5) 軍隊小説については、劉席珍「人格、命運和歴史——論沈従文筆下的軍人形象（『吉首大学報 沈従文研究專号』一九九一年一月）、中野智洋「沈従文の軍隊小説」（『集刊東洋学』第七七号、一九九七年五月）がある。この中で中野氏は、近代の視点から軍隊と『辺城』の関りを論じている。
- (6) 『小説月報』第二十巻九号 一九二九年九月。
- (7) 吳立昌「沈従文——建築人生神廟」復旦大学出版社 一九九一年一月。
- (8) 『戦争と罪責』（野田正彰著 岩波書店 一九九八年八月）には、「特高の神様」と言われるまでになった農村出身の憲

兵が、いかに勤務評価を良くして昇進したか、次のように載っている。「彼は何事も機敏に行った。軍隊では真つ先に終えることが評価される。(略)すべてにおいて、彼は要領がよかった。上官への世話によつて点数稼ぎをするような競争に加わらず、例えば便所掃除を休まず続け、それとなく上官に気づかれるようにした。(略)要は、上官の期待する兵隊の形を上手にこなせばいい。機敏で、真面目で、曖昧なところのない様子を示せばいい。それを、彼はいち早く理解した」。『会明』の中の「猿のように利巧な仲間」とは、こうした機敏さを持った人間を表現しているだろう。

- (9) 時代書局 一九三四年初版、『沈従文文集』第九卷 花城出版社 一九八三年所収。
- (10) 「我上許多課依然不放下那一本大書」
- (11) 『中国現代史』山川出版 昭和五十九年。
- (12) 『中国軍閥の興亡』来新夏編著 岩崎富久男訳 光風社選書 平成元年。
- (13) 『新月』第二卷十二期 一九三十年六月。
- (14) 『画師家兄』晨报副刊 一二六一号 一九二五年、『沈従文文集』第八卷所収。
- (15) 「我所生長的地方」
- (16) 「我上許多課依然不放下那一本大書」
- (17) 「懷化鎮」
- (18) 「北斗」二卷一期、三期・四期合刊。『丁玲文集』第三卷 湖南人民出版社 一九八三年 所収。